博物館学雑誌 第28巻 第1号（通巻37号）63〜71ページ 2002年12月

【報告】

博物館と学校の連携
—ミュージアム「みのかも文化の森」での実践を通じて—

A Cooperative relationship between the museum and local schools
—How we have practiced this relationship at the Minokamo Cultural Forest.—

西尾　円*
Madoka NISHIO

1．はじめに

みのかも文化の森[1]は平成12年10月に開館した公立[2]の博物館・美術館、そして教育センター[3]の機能をそなえた教育・文化複合施設である。新設の施設である本館は、開館前から、学校が博物館を利用しながら学習活動を行えることを念頭に置いて準備を行ってきた。限られた時間の中、学校教育関係者、文化の森[4]関係者をはじめとする多くの人が、来る21世紀の教育文化のあり方を模索する中で、様々な期待を込めて現在の「みのかも文化の森」の形を作り上げてきた。

そして、今日新学習指導要領の施行に伴い、博物館と学校が協力関係を築くことが求められている。博物館にとっては、どのように学校を受け入れるのか、館として何を提供することができるのかといったこと、学校にとってはどのように博物館を利用しながら、どのような授業を行うことができるのかといったことが課題として立ちはだかっているであろう。どの館にとっても今は手探りの状態ではないだろうか。そこで、本稿では、「みのかも文化の森」における学校との関係、すなわち学校活用のあり方について報告を行う。どのような経緯で現在の学校との関係を作り上げたのか、「みのかも文化の森」の職員はどのような関わり方をしているのかということに多くの方の関心があるのではないか、と考えるからである。

なお、本稿で使用する語句については、次の通りに定義する。

・「みのかも文化の森」

「みのかも文化の森」とは、博物館・美術館と教育センターといった複数の機能を含めた機関の総称である。通常は、博物館・美術館の機能部分を「美濃加茂市民ミュージアム」、教育センターの部分を「美濃加茂市教育センター」と呼んでいる。本稿では、教育センターも含め、館全体として子どもたちの学習活動に携わっている、これからも携わり続けたいという期待を含め、あえて「みのかも文化の森」という表現を使用することを付記しておく。

・学校活用

教科の単元の学習と結びついた活動など、本来学校で行う教育活動を、「みのかも文化の森」にあるものを利用しながらおこなう学習活動のことを特にこのように呼んでいる。

・「もの、ひと、こと」

「みのかも文化の森」にある、あるいはここで生じる講座などの様々な事物を指す。具体的には、次のことである。「もの」とは数々の貴重な展示品や資料など、ミュージアムで所有している財産のこと。「ひと」とは、専門的な知識を持つ学芸員や様々な経験を持つボランティアの存在である。「こと」とは、「み

＊みのかも文化の森

平成14年7月30日受理

のかも文化の森」で開催する様々なジャンルにわたる講座やフォーラム、展示会などの催しのことである。

2.「みのかも文化の森」とは

(1)「みのかも文化の森」の設立の経緯

「みのかも文化の森」が完成するまでに17年の年月がかかった。

「みのかも文化の森」の設立の始まりは、昭和58年3月の「美濃加茂市郷土資料館建設基金条例の制定」までさかのぼる。当時、国の方針としても郷土資料館の建設に際して補助をおこなう方針が示され、また地域の歴史民俗資料を収集し、保存、展示するために、各地に資料館が作られた。美濃加茂市においても、市内各施設に散在している資料や市内の遺跡から出土した遺物を1ヶ所に保管し、展示する必要から先の条例が制定され、郷土資料館建設の方針が打ち出された。その後、「郷土資料館」の構想が練られていくが、平成6年になり、博物館と教育センターの複合施設という現在の形が案として提出された。「博物館として学校との連携はすでに叫ばれていた大きな課題であり、また、教育センターとしても学習における博物館資料の有効活用が検討されていた。[5]」ためである。この案は、平成8年に予算化され、複合施設としての基本計画が進められることになる。この時に打ち出した方針の中に「森の学校」があり、学校でおこなう授業の一部を「みのかも文化の森」でおこなうことが提示された。平成10年には、歴史民俗の資料調査をおこなう「文化の森ボランティア」が発足し、寄贈された資料の分類・整理をはじめ資料の使用方法を研究し記録に残した。また、平成12年5月には、「みのかも文化の森ボランティア」の募集を行い、開館までに数回の研修を実施した。施設の建設については、平成11年8月に施設工事に着工、平成12年3月に完成した。

(2)「みのかも文化の森」のコンセプトと学校活用

「みのかも文化の森」は、「自然との共存」、「学校教育との連携」、「市民参加を中心に考える」、「地域づくり」をコンセプトとしている。特に、「学校教育との連携」については、「森の学校」を合い言葉とし、この地域の文化や歴史資料、自然などを生かして様々な体験活動を通して深く広く学ぶことができる場を目指している。

従来の博物館のように学校との関係が希薄であったり、これから関係づくりをすすめようとしているのではない、当初から学校と連携を念頭に置いた新しい形のミュージアムを目指している。

3.「森の学校」としての「みのかも文化の森」

(1)「森の学校」の成り立ち

先の設立の経緯でも触れたように、「みのかも文化の森」で学校活用を行うことが、博物館建設計画の当初から積極的に考えられていたわけではなかった。平成8年になり複合施設建設の建築基本設計と展示基本設計のための予算化が行われた。「みのかも文化の森」を建設し、この場所で子どもだけでなく大人も一緒になって「この地域の文化や歴史資料、自然などを生かしながら体験を通して学ぶ学習活動」を行うことが市民にも理解され、期待されたことによるといえる。その後、当時の教育センターが中心となり、文化の森整備検討委員会、文化の森構想教科専門部会などを設立した。そこでは教科学習についてどのような利用の仕方ができるのかということについてアンケートを実施し、学校関係者の期待や願いを集めた。

一方、当時の文化課が事務局となり、「森の学校」についての考えをまとめた。その内容を引用する[6]。

> 事務局（文化課）でつぎのように「森の学校」を提示、従来の形にとらわれない自由な学習形態をこの森の中で展開できないかを検討し始めた。
>
> ・「博物館」「学校」の枠を取り払う。
> ・一つの事象を様々な角度からとらえる。
> ・イベント的、場当たり的としない。
> ・「秘密基地を作る」「民家の縁側でお話会」「間伐材を切り倒す」「たぬきの糸車」など森の素材を活用するメニューを考える。

(2)「みのかも文化の森」での学習

「みのかも文化の森」での学習は、3つの大きな意義があると考える。

まず、「みのかも文化の森」にある「もの」と「ひと」を効果的に使うことを念頭においている。学校での授業では教科書や資料集、教員の話などから学び、一方、「みのかも文化の森」には、美濃加茂市を

含むこの地区の歴史、民俗、自然、文化、美術に関わる「本物」が収集・展示され、各分野を専門的に調査・研究する学芸員がいる。子どもたちは、「本物」を目の当たりにし、その大きさを実感したり、触ったりするとともに、学芸員から様々なエピソードを聞き、また自らの疑問に答えてもらうことにより、教科・内容に対してより高い興味関心を抱き、さらに追究したいという学習意欲をかきたてるきっかけとなりうると考える。次に「みのかも文化の森」での学習においては、「楽しみながら学ぶ」ことも大切にしている。教科書の内容を倣って「みのかも文化の森」の中で実践している訳ではない。遊びの感覚も取り入れた教材を利用する。最後に、学習係や学習支援ボランティア、学習に携わったボランティア、さらには来館者といった人の出会いと触れ合いを大切にしている。

(3)「森の学校」を支える人々

(a) 学習係[7]と学芸係

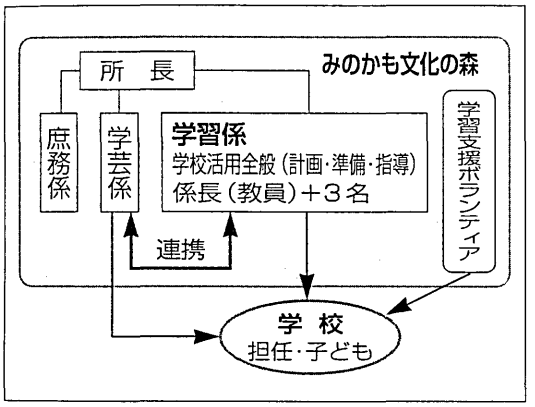


図１　学校活用の際の協力体制

「みのかも文化の森」には、庶務係、学芸係、学習係がある。

「みのかも文化の森」の大きな特徴は、この学習係の存在である。学習係は、幼稚園・保育園、そして小中学校が「みのかも文化の森」で学習する際に対応するための専門の係として設けられた。本係は現在４名で構成され、係長には教員が配置される。

学習係は、学校活用に関わるすべてにわたり計画・実践を行う。具体的には、市内の全小中学校の学校活用の割り当てを計画する、学校（担任）との学校活用の打ち合わせおよび準備、学芸員やボランティアと学校との連絡調整、活動の当日には、子どもたちの引率や指導を行う。また、「みのかも文化の森」ならではの学習ができるよう、教材開発もおこなっている。

一方、学芸係は資料の収集保存や調査研究、一般市民を対象とした企画展や各種講座を通しての教育普及活動を行う。それに加えて、「みのかも文化の森」での学校活用へも深い関わりを持っている。学芸員としての専門的な知識を必要とするような学習活動を行う場合には、講師として活動に参加する。その際、活動当日だけでなく打ち合わせの段階から学校活用に関わりを持っている。また、館として開催する展示会、例えば、生活体験館などで開催する特別展では、学習内容と連動した内容で開催することもある[8]。さらに、後述する「文化の森活用委員会」へも参加するなど、ミュージアムとして学校活用に利用できる「こと」、「もの」の可能性を提示している。

(b) 学習支援ボランティア

「みのかも文化の森」には、５つの分野のボランティア、すなわち「展示ガイド[9]」、「アート[10]」、「生活体験[11]」、「学習支援」、「伝承料理の会[12]」の約140名が登録している[13]。「学習支援ボランティア」は、学校活用の際に子どもたちの引率や館内の案内、学習活動の補助（活動時に子どもたちに声掛けを行ったり、安全面での配慮）、ボランティアが経験したことについてお話をしてもらうことなどを通じて、子どもたちにとって最も身近なボランティアとして活躍している。学習活動中には、ティームティーチングの形をとり、担任がＴ１、学芸員・講師がＴ２、学習

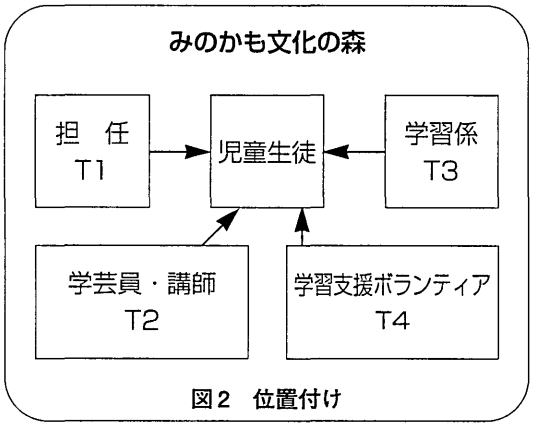


図２　位置付け

係がT3、学習支援ボランティアはT4という位置づけになる。学習支援ボランティアは、配られた活動計画案を見ながら学校活用に参加する。現在、学習支援ボランティアには、学生・主婦・教職退職者など、様々な年代・経験をもつ26名の登録がある。

また、学校活用の様々な場面では、学習支援ボランティア以外のボランティアにも協力をお願いしている。例えば昔の暮らしの「食」の内容では、伝承料理の会のメンバーに講師として参加してもらい、「昔の遊び」では、生活体験ボランティアから遊び道具の作り方や遊び方を教えてもらうなど様々な側面から学習を支えてもらっている。

(4) 学習の効果を高めるために

(a)「ぶんぶんバス」[14]

市内の学校から「みのかも文化の森」へ学習に来る際の課題となるのが、その交通手段であった。「みのかも文化の森」に近い立地の学校や遠足での利用、中学生の利用であれば、徒歩や自転車を利用することも可能である。しかし、限られた授業時間を有効に利用するためにも、移動時間が短い方が良い。そこで、学校と「みのかも文化の森」の間を往復する専用のバスを所有することが学校側と文化の森側との双方からの希望として出された。幸いにも、美濃加茂市で使用していたバスを1台譲り受けることができ、「みのかも文化の森」の開館時から利用できることとなった。このバスは「みのかも文化の森」が所有する専用のバスであり、40人乗り（補助席使用）である。1クラス分の子どもたちを1回で輸送することが出来ることとなったが、大規模の学校の場合には、「みのかも文化の森」と学校の間をピストン輸送することにしている。

(b) 移動給食

学校と「みのかも文化の森」を結ぶ交通手段の他に課題となったのが、終日「みのかも文化の森」で学習する際に、昼食をどのようにするのかということであった。「みのかも文化の森で学習するならば、一日じっくり時間をとり学習したい、そのためにも学校と同じように給食が利用できるといい」という学校側からの要望が挙げられた。保健所と給食センターと話し合いを重ね、そして指導をいただき、専用の給食用コンテナ、冷蔵庫、配膳台を用意、衛生面に十分配慮することを条件に、移動給食が実現した。「みのかも文化の森」で一日学習をおこなうときには、事前に学校から給食センターへ連絡・予約することにより、「みのかも文化の森」へ給食が配送されることとなった。

(c)「文化の森活用委員会」

「みのかも文化の森」には、この場所でどのような学習活動を展開できるか、どういった工夫をする必要があるのかということを検討する会があり、それが「文化の森活用委員会」である。「文化の森活用委員会」には、市内の小中学校の代表の教員が1名ずつと「みのかも文化の森」の所長、学習係長、学芸係長、教育センター長が参加する。必要に応じて、学芸員や学習係の係員も参加する。

この「文化の森活用委員会」発足のきっかけとなったのが、開館前の平成9年度、「みのかも文化の森」でどのような学習ができるのかを検討するために、設立された「みのかも文化の森準備委員会」、そして12年度からは名称を改めた「文化の森活用委員会」である。活用委員会では、11年3月（「みのかも文化の森」の開館1年半前）に、それまでの検討の成果として『みのかも文化の森活用の手引き』第1集を発行した。また、翌年3月には、第1集にさらなる検討を加えた第2集を発行した。

(d) 収蔵資料のデジタル化と「逍遙ネット」

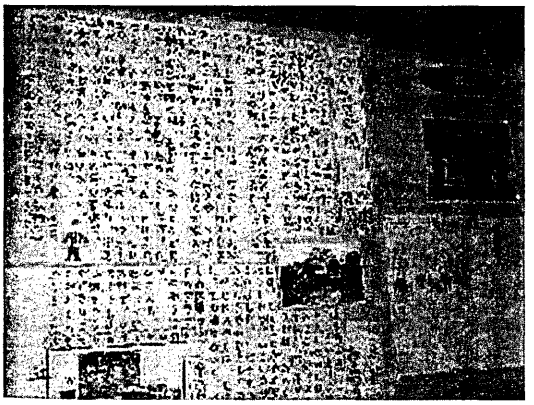
「みのかも文化の森」では、館が所有している資料や図書をホームページ上で公開している。一般の来館者が利用できるだけでなく、学校の教員や子どもたちも閲覧できる。館内の展示室にあるパソコンからもホームページにあるのと同じ内容を閲覧することができる。民具展示館には、寄贈して頂いた資料のいくつかを展示している。展示室には展示された資料だけでなく、パソコンが一台置いてあり、そのパソコンでは、昔の暮らしに関わる資料の名称や使い方を調べることができる。それだけではなく、道具の使用の様子を動画として見ることもできる。展示のみでは動かない資料であるが、画像を組み込むことにより視覚的に理解しやすくなるようにしている。

また、平成12年度から計画のあった「逍遙ネット」が平成13年度9月から機能し始めた。この「逍遙ネット」[15]は、市内の小中学校と「みのかも文化の森」を含む教育委員会、そして市内小中学校に子どもが

通っている家庭とをインターネットで結びつけるもので、学校と地域を結びつけるイントラネットである。そもそも、この「逍遙ネット」は情報化が進む中、子どもたちのインターネットの学習環境を整えることを目的としていた。学校には各教室に1台ずつパソコンが配置された。この「逍遙ネット」には、市内小中学校のクラスページのほか、「掲示板」と呼ばれる連絡事項を掲示するページ、「みのかも文化の森」の学習係のページなどがある。学習係のページは、「お知らせ」、「年間活動計画」、「学習活動案（テンプレート)」、「備品リスト」という構成になっている。「年間活動計画」には、学校活用の学校名と活動内容を掲載している。「学習活動案（テンプレート)」は、過去に行った学習活動案がデータとして入っており、学年別・教科別に検索することができる。そして、打ち合わせに来館する前に、大まかな活動内容や時間、必要となる設備や道具などを入力する計画書の様式があり、これを使って活動の申し込みをすることができる。

(5) 子どもたちのこころに残るものは

「みのかも文化の森」での学習を通じて、子どもたちの心の中にはどんなことが残っているだろうか。言い換えれば、学習の成果がどのように現れているのだろうか。無論、そのような成果は、すぐに表れてくるものではないが、「みのかも文化の森」で、学芸員やボランティアから説明を受けたり、一緒に作業する活動を通して、「これまでの学校での学習とは異なる」、「いろいろな人が自分たちの勉強を一緒になってやっている」ということを感じてくれている



学習の成果を壁新聞に

のではないか。「みのかも文化の森」で出会う「もの」や「ひと」から学んでくれているのではないか。それは、子どもたちからもらうお礼の手紙や、授業中にふともらした言葉からも、うけとめることができた。

①展示室で、土器や石器を見学、出土品の復元室で整理・保存する過程を学んだ後、子どもたちからは「教科書に載っているものの本物をみることができてよかった」、「縄文土器って、おっきいなぁ」といった感想が発せられた。

②昔の遊び道具の竹とんぼづくりを教えるボランティアが、手本を見せているさなか、刃物で誤って手を切ってしまった。本人は何事もなかったかのように、指にサックをはめて作業を続けた。その授業に参加した子どもたちが、帰宅し両親に話したことは、竹とんぼが遠くへ飛んだということよりも、そのボランティアの人がひどいケガをしながらも、一生懸命説明をしてくれたことであったという。

4.「みのかも文化の森」の学校活用の事例

(1) 授業計画

「みのかも文化の森」での学校活用も、学校内での学習と同じく、学校（担任）が中心に行う活動である。よって、授業の計画を立てたり準備などは、本来は担任が行わなくてはならない。「みのかも文化の森」にある施設や道具を利用するため学習係と一緒に打ち合わせを行い、必要な準備を整えることになる。子どもたちが楽しく、安全に学習することができるような活動、言い換えると効果的な学習活動にするためにも事前に学校（担任）と「みのかも文化の森」(学習係）と打ち合わせをすることは不可欠なことであると言える。

まず、「みのかも文化の森」での学校活用日の2週間ほど前に担任が来館する。そして、学習係と打ち合わせを行う。その中で、希望する学習活動についてのねらいや具体的な活動内容、活動時間そして学習支援ボランティアへ期待する支援内容について、担任と話をする。教科の学習となる場合には、活動が位置付く単元を教科書と照らし合わせている。机上の話し合いだけでなく、実際に活動する場所へ出かけていき、どのような活動が展開できるのか、子どもたちはどのような反応を示すのかといったこと

も担任は考えることになる。また、学校活用へ学芸員の参加希望があった場合や、学芸員の参加により学習が効果的に行えるのではないかと判断した場合には、打ち合わせの場に学芸員が参加している。
先述した「逍遙ネット」での申し込みを行った場合にも、1度は必ず打ち合わせを行うようにしている。それは、担任と顔をつきあわせて打ち合わせを行うことにより、担任が期待する学習効果を最大限に引き出し、実践するためである。

この打ち合わせ結果は、「活動計画案」として学習係が計画案を作成、ファックスや電子メールを利用して担任に送付する。担任の確認後に修正などを行う。この「活動計画案」は1週間分をまとめ、「みのかも文化の森」の職員および学習支援ボランティアへ配布している。この「活動計画案」で学校がどのような活動をしに来ているのかを知ることができる。

(2) 学校活用の1日

子どもたちが「みのかも文化の森」に到着すると、まず館内への入場の前に、ミュージアムを利用する約束を2つする。一つは、大きな声をださない、走らないということ、もう一つは館内への入場時にマットで靴の汚れをとることである。子どもたちの学習の場でもあるが、一般来館者のいるミュージアムという施設での学習であることを理解してもらうためである。

次に、エントランスホールで「はじめの会」を学校の司会により行う。学習のねらいを発表したり、学芸員や講師、学習係、学習支援ボランティアの紹介の後、学習係から本日の活動についての注意事項などを話し、活動に入る。「はじめの会」では、歌を披露してくれる学校もある。活動終了後は、「おわりの会」を学校の司会により行い、子どもたちの感想や学習係・学習支援ボランティアの感想を発表する。

(3) 事例1

(小学6年、社会科　日本の歴史「米づくりのむらから古墳のくにへ」)

この学習では、遺跡や石器、土器などの見学し、話を聞くことで、縄文・弥生時代の人々の生活を知ることをねらいとしている[16]。

①常設展示室で展示してある縄文・弥生土器を見比べ、どんな違いがあるかを発表させる。子どもたちの発言から、学芸員が専門的な説明を加える。そして、自分たちの学区にある遺跡について、発掘の流れについてパソコン[17]で検索し、身近なところに遺跡があることに気づかせる。また、気に入った土器をスケッチする作業をいれ、土器をより詳しく観察する時間をとることもある。

「ほんもの」の見学

②土器整理室へ移動し、発掘した土器の破片などをどのように保存・整理しているのか、話をする。発見した出土品についてどのように保存処理しているのかということや扱い方などミュージアムとしての願いを子どもたちに伝える時間としている。

③森へ移動し、保存住居跡[18]を見学する。「みのかも文化の森」が昔の住居の跡に建っていることを説明、本物の住居跡を見学しながら、昔の人がどのような生活をしていたのかを考える。その後、森のなかで、出土品探しを行う。

④学校によっては、縄文土器[19]を自分で作ってみる活動を取り入れる場合もある。見学した縄文土器を思い浮かべながら、約1時間半の時間で土器をつくる。

(4) 事例2

(小学2年、生活科「生きものとともだち」)

この学習では、「みのかも文化の森」の森の様子を観察し、進んで生きものを探すこと、虫がどのような場所にいるか知ることができることをねらいとしている。この学習は、森の中で活動するため、害虫や毒蛇などに特に注意を必要とする。学習支援ボランティアには、子どもたちと一緒に虫探しをすることの他、児童の安全を確認してもらうことも重要な役目としてお願いしている。

①グループごとに森の中へ出かけていき、虫探しを

する。虫を捕まえ観察をする。
②見つけた虫をスケッチする。どのような場所にいたのか、どんな色をしているのかということも記入する。

(5) これまでの学習内容

事例としてあげた学習内容のほかに、「みのかも文化の森」にある様々な「もの・ひと・こと」を使った活動を行っている。そのうちのいくつかを例に挙げる。

学　年	教　科	単元・内容
小　1	生活科	あそびにいこうよ
		館内見学
小　2	生活科	こんなところでならべたよ
		森の植物をならべる
小　3	音　楽	いい音えらんで
		竹の楽器「トンガトン」づくりと演奏会
小　3	理　科	チョウを育てよう
		美濃加茂にいるチョウの学習
小　4	社会科	住みよい暮らしをささえる
		昔のゴミと今のゴミ
小　5	総合学習	伝統文化に親しむ
		茶の湯、華道、狂言のビデオ鑑賞
小　6	社会科	米づくりの村から古墳のくにへ
		縄文土器・遺跡の見学
中1、2	総合学習	文化の森で調べ学習
全学年		企画展の見学

5．終わりに

(1) 成　果

開館から約2年、「みのかも文化の森」は、試行錯誤の中これまで述べてきたような活動をおこなってきた。これらの活動を通して、次のような成果があったと考えられる。

まず、一つ目に、「みのかも文化の森」という美濃加茂市にあるミュージアムでしかできない授業の開発ができたということである。森の中でのフィールドビンゴや森の基地づくりなどの自然を生かした活動、高い芸術性や専門性をもつ企画展の見学、専門的な知識を持つ学芸員の解説による学習、そして地域の遺跡や文化財についての学習などである。すべてがミュージアムにある「もの・こと」であり、それを存分に活用することができた。このような学校活用の「足跡」とも言えるのが、毎年度刊行している『文化の森　学校活用実践集』である。学習のねらいや流れを、活用の当日に使用した「活用計画案」をもとに、見やすくまとめ直したものである。授業の流れだけでなく、活動風景の写真や子どもたちに資料として配付した学習プリント等の資料も掲載している。

二つ目には、子どもたちが学習のために「みのかも文化の森」へ足を運ぶことで、「ひと」と出会うことができるということである。学習の時に一緒に活動する学芸員や学習係や学習支援ボランティア等の存在などについて、子ども自身が自分の学習活動に多くの人の関わりがあることに気づく。学校から送られてくる活動のお礼の手紙にも記されている。

三つ目に、子どもたちにとって、博物館や美術館といった存在が身近になったことが挙げられる。子どもたちが休日の催し等へ参加したり、「美術館だから静かにしようね」と話し合う姿が見られる。「みのかも文化の森」は、子どもたちにとって「楽しいことがあるところ」であり、同時に「いろいろ勉強ができるところ」でもある。館側にとっても、これは来館者（リピーター）が増えることにつながり、大いにメリットがある。

(2) 課　題

その一方で、これから検討していかなくてはならない課題もいくつか残っている。

まず、一つ目に中学校の活用についてである。現在も中学校の活用は、総合的な学習の時間として活用されている。しかし、中学校は教科担任制でもあり、日程の調整が難しいこと、総合的な学習の時間以外の教科での利用が少ない。

また、二つ目として「生きる力」を育むための学習プランづくり・教材づくりをこれからも行っていくことである。「みのかも文化の森」では、様々な活用の方法があると考えられる。昨年度とは少しでも異なる内容の活用ができるよう、また将来にわたり子どもの「学び」の原体験となるような学習を開発することが必要である。

最後に、「みのかも文化の森」での学習の評価をどのように行うかということが課題となる。評価を行うのは学校であるが、授業に携わる館としては、ど

の子どもたちも授業のねらいを達成することができるよう導きたい。導くことができるような問いの投げかけ、活用の流れを作っていきたいと考える。

「みのかも文化の森」は今年度で、3年目を迎える。「みのかも文化の森」での学校活用のあり方は、一つの「博物館と学校の連携」の形である。建設の段階からの準備、学校関係者や博物館関係者の幾回にもわたる会議など、双方の歩み寄りにより現在の仕組み・流れができあがった。そして、「みのかも文化の森」におけるこの連携は、ボランティアとして関わりを持つ地域住民も巻き込んだ形となっている。これまでに検討された様々な活用方法やボランティアとの関係を大切にしていきたい。そして、教材研究はもちろんのこと、「みのかも文化の森」の各係との協力・研究・連携を強化していきたいと考える。

[註]

1　みのかも文化の森（Minokamo Cultural Forest）

2　岐阜県美濃加茂市立。美濃加茂市は、岐阜県の南部にある人口約5万人強の地方都市である。旧五街道の1つ中山道が通っており、太田宿という宿場があったことでも知られている。また、文豪坪内逍遙や歴史学者津田左右吉の出身地として知られている。

3　教育センターは平成12年から13年の2年間は、「みのかも文化の森」に所属していたが、平成14年4月から、学校教育課の所属となった。事務所はそのまま「みのかも文化の森」内にある。

4　平成12年4月に組織改革により、現在の美濃加茂市教育委員会文化の森が設置された。それ以前は、文化課であった。

5　可児光生「何をめざそうとしていたのか—市民ミュージアム設立までの17年間—」『美濃加茂市民ミュージアム紀要　第1集』(2002年、4頁)

6　可児　前掲論文『美濃加茂市民ミュージアム紀要　第1集』(2002年、5頁)

7　本文中の「図1　学校活用の際の協力体制」は、古田哲也「博物館と学校教育のコラボレーションによる継続的・計画的な授業の実践」(2002年2月10日開催の「日本ミュージアム・マネージメント学会」の発表レジュメ）による。

8　たとえば、平成14年1月16日から2月17日まで開催した「暮ラシカル道具展'02」が挙げられる。この特別展では、昭和30年代に使用していた身近な道具を展示した。この時期、小学校3年生の社会科では、「昔の暮らし」を学習するため、特別展と結びつけ、展示資料の見学をワークシートを使いながらおこなったり、薪割りや火おこしなどを体験する。

9　常設展示室にある展示品についての解説などをおこなう。

10　「みのかも文化の森」が主催する美術系の展示や講座、ワークショップへの参加や準備等の手伝いや映画上映会などの活動を行う。

11　生活体験館や民具展示館などで展示品についての解説をしたり、生活体験館周辺でおこなう講座への参加や講師をする。

12　「みのかも文化の森」が主催する講座で来館者と一緒にこの地域に伝わる料理を作ったり、講座のための研究を行う。

13　「みのかも文化の森」のボランティアの申込は、市内外からある。「無償性、公共性、自発性」といったボランティアの原則は大切にしながらも、従来の意味の「ボランティア」とは異なると考える。それは、館が必要とするときに運営に力を貸すというボランティアからの一方向の協力関係だけを意味しているのではない。ボランティアからの意見を館の運営に反映させること、活動をとおしてボランティアの自己成長をも期待している。

14　このバスの名称の由来は、市内の小中学生から公募して決定された。「みのかも文化の森」の「ぶん」と蜂がブンブン音を立てて集まる様に子どもや大人が「みのかも文化の森」へ集まり学ぶ姿を重ね合わせたイメージの「ぶん」をあわせたことによる。

15　この「逍遙ネット」は、外部には公開されていない。

16　学校の希望により割愛する内容がある。

17　このパソコンは展示室に備え付けのものであり、来館者なら誰でも利用できるものである。

18　みのかも文化の森は、尾崎遺跡という遺跡の上に建っている。施設の建設前に発掘調査した住居跡のうちの1つに処理を施し、保存展示している

もののことである。

19　陶芸用の粘土を使い、ひもづくりで土器を作る。形が出来上がるまでに約1時間半で、乾燥と素焼きは後日文化の森で行う。

[参考文献]

みのかも文化の森『みのかも文化の森　要覧』(2000年、美濃加茂市教育委員会文化の森)

美濃加茂市民ミュージアム『美濃加茂市民ミュージアム　紀要　第1集』(2002年、美濃加茂市教育委員会文化の森)

美濃加茂市教育センター『平成12年度版　みのかも文化の森活用の手引き』(2000年、美濃加茂市教育委員会)

美濃加茂市教育センター『平成13年度版　みのかも文化の森活用の手引き』(2001年、美濃加茂市教育委員会)

みのかも文化の森『平成12年度版　みのかも文化の森　学校活用実践集』(2001年、美濃加茂市教育委員会文化の森)

みのかも文化の森『文化の森活用の手引き・活用実践集　平成13年度版』(2002年、美濃加茂市教育委員会文化の森)

古田哲也「博物館と学校教育のコラボレーションによる継続的・計画的な授業の実践—みのかも文化の森／美濃加茂市民ミュージアム—」(2002年、『Cultivate　17』)